

Toyota City Museum
Of
Local History



目次

- ・郷土史調査レポート 「藤沢煤冢と千匹絵馬」————— 2
- ・企画展 「籠川流域の遺跡群—猿投遺跡調査会寄贈資料を中心に—」—— 4
- ・地域資料館紹介 城跡公園足助城・市場城址・香恋の里 ————— 6
- ・埋蔵文化財調査速報 ————— 7
- ・文化財シリーズ59・資料館 NEWS ————— 8

ばい あん 藤沢榊と千匹絵馬

本紙No56で報告しました小馬寺の千匹絵馬についてその後作者の人物像や同様な作品のあることなどさまざまなことが判明してきましたので再び紹介したいとおもいます。

前回の報告と一部重複しますが、小馬寺の千匹絵馬は縦1.82m、横3.87mの扁額形の大型絵馬です。額面は長さ1.8m余、幅0.2～0.4mのヒノキの縦板14枚を横に合わせて構成され、裏と外縁を角材で頑丈に組み合せる構造になっています。嘉永4年(1851)の年号、榊藤忠為の作者名・落款、裏面に時の住職名、施主名が墨書されています。市内牛地町の駒山(867m)山頂部にある小馬寺に奉納されていた絵馬です。小馬寺は古くは天台宗の山岳寺院でしたが、延宝年間(1673～81)に臨済宗に改宗され、南朝伝説や馬の信仰でよく知られた寺院です。本尊は十一面観世音菩薩。残念ながら現在は伽藍の一部を残すのみとなってしまいました。



小馬寺千匹絵馬・部分

作者を「棋庵藤忠為」と記していましたが、精査の結果「榊藤忠為」であることがわかりました。榊が雅号、藤忠為が本名で藤は藤沢を略した表現であり、したがって藤沢忠為ということになります。書画骨董や落款、印譜関係の幾種類かの人名事典類を調べるなかで江戸時代の画家、信濃国の人まではわかってきましたが、それ以上の事柄は詳らかになりませんでした。しばらく後に長野県歴史館に照会したところ下伊那郡箕輪町出身の画家であることと合わせて『長野県上伊

那郡誌』、『上伊那郡史』に記載のあることを教えていただきました。

榊は寛政元年、東箕輪村北小河内(現下伊那郡箕輪町北小河内)の丸山文左衛門の次男に生れ、成長して長岡村(現箕輪村)の藤沢庄左衛門の養子となりました。榊のほかに龍水、榊雅^{ばい が あん}、梅庵^{ばい あん}とも号し、子誠、録良兵衛の別名もあります。家号を南陽窟^{なんようくつ}と名づけていました。幼時より画を好み紙片があれば絵を描き楽しんでいたといわれています。長じて江戸にでて谷文晁に学んで研鑽をきわめ、花鳥、人物、山水を得意としました。狩野派で丸山、四条派をおさめた大阪の画家・森狙仙^{もり そ せん}とも交流がありました。書、版画、造園にも造詣がふかく作品があるといわれています。松本市^{と せん じ}兎川寺の天井画、伊那市^{ちゅう せん じ}仲仙寺の千匹馬の大額、辰野町高德寺の天井画(焼失)が代表作といわれています。安政4年、69歳で没しました。

代表作のなかに仲仙寺の千匹馬の大額とあり、しらべて見ることにしました。仲仙寺は伊那市の西箕輪にあり、古くから羽広の観音さん、羽広観音としてよく知られた寺院です。伊那市は伊那谷中最も広い沖積地であり、仲仙寺は木曽谷と伊那谷を結ぶ権兵衛峠の麓にあり、建久年間(1190～99)の創建といわれ、山号を羽広山といい、天台宗の古刹で十一面観世音菩薩を本尊とし、馬の寺、絵馬の寺として著名です。



仲仙寺遠景

境内には仁王門、庫裏、中門、観音堂(本堂)と階段状に建物があり、文亀元年の修理銘を有する持国天、

多聞天像があります。観音堂は安永7年の建立で5間×5間、向拝1間、前2間を周囲吹き放しの外陣と内陣は格子戸で仕切られています。



仲仙寺観音堂

この吹き放しの外陣に絵馬が掲げられています。絵馬は大型の絵馬7面と中型の絵馬8面が奉納されています。大型の絵馬が千匹絵馬です。年代的には寛政元年から文化、文政、嘉永、明治、昭和、平成まであり、寛政年間4面、文化、文政、嘉永各1面、明治2面、昭和1面、平成4面で平成13年が最も新しいものです。以上のほかに隣接する伊那市考古資料館に4面の千匹絵馬が所蔵されています。嘉永、文久各1面、明治2面の4面です。馬に対する信仰の深さがうかがわれます。双方の絵馬のうち13面が伊那市の文化財に指定されています。



仲仙寺千匹絵馬

観音堂に掲げられている嘉永2年の年号を有する絵馬が藤沢樗菴の作品とおもわれます。絵馬の大きさは正確に計測できませんでしたが、上下1間、幅2間で、小馬寺所蔵と同サイズとおもわれます。画面の構図は

画面右寄りに満開の桜の老大木を中心に笹と松を配し、上方に白雪を頂いた山岳を描きその間の平原に累々と馬をあらわしています。小馬寺の絵馬の構図に非常によく似ています。描かれている馬の数は仲仙寺所蔵のほうが多いようにみられます。個々の馬の描き方、彩色方法もきわめてよく似ています。残念ながら樗菴の銘は確認することができませんでしたが、樗菴の作品であると考えられます。仲仙寺の絵馬には画面下端に罫線をひき奉納者の名前が村名、馬の毛色、氏名の順で多くの奉納者名がびっしりとかかれています。



仲仙寺千匹絵馬・部分

伊那地方は大陸系の石室と同様の形態をしめす古墳の存在や中世の牧がおかれるなど馬産地として古くから全国的によく知られた地方です。美濃から御坂峠を越え伊那谷から東国につづく東山道の要所でもありました。近世には三河からの三州街道、諏訪、高遠からの金沢街道と合流する伊那街道の中心地でした。仲仙道からははなれていましたが飯田、高遠藩により宿が整備され中馬輸送による物資の行き交う街道として栄えた大動脈でした。小馬寺と同様な中馬輸送、馬産地など馬匹産業という歴史的な背景があったことがわかります。中馬街道沿いには馬頭観音の石仏や「ぜんかうじみち」等と刻まれた道標がのこされ、善光寺参詣の道でもありました。このような共通の背景のもとに藤沢樗菴の筆になる千匹絵馬が存在することに歴史の広がりや重みと、江戸時代庶民のエネルギッシュな活動を感じることができます。

本稿執筆にあたり神谷早苗氏、兎川寺、伊那市教育委員会、長野県歴史館よりご教示をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

（松井孝宗）

籠川流域の遺跡群 —猿投遺跡調査会寄贈資料を中心に—

豊田市北西部に位置する猿投地区の北端には猿投山が緩やかに裾を広げ、南麓には西三河屈指の大社である猿投神社が鎮座しています。地区を代表する籠川は、猿投山に端を発する猿投川・広沢川・加納川を集めて南流し、伊保川と合流して南東に向きを変えた後に矢作川に合流します。この流域は今なお古里の風景をよく残しており、猿投山の恵みを受けた先祖たちの暮らした跡が、遺跡としてその姿をとどめています。

文化財保護行政が十分でなかった昭和40～50年代に、猿投町誌編集委員会・猿投遺跡調査会は、開発で消え行くふるさとの遺跡を懸命に調査し、数多くの成果を挙げました。今回の展示は、会の代表者であった大橋勤氏より豊田市に寄贈された貴重な出土資料を初公開するものです。

■ 水汲遺跡（下川口町水汲）

遺跡の時期は縄文時代早期から晩期に及びますが、中でも前期後半と中期後半の造形豊かな土器が多く見つかっています。環状配石遺構などは、縄文時代の精神生活の一端を知ることができる貴重な調査例となっています。



水汲遺跡の縄文土器

■ 伊保遺跡（保見町・東保見町）

本遺跡は弥生・古墳時代の拠点的な集落遺跡であり、竪穴建物37棟などが見つかっています。櫛口地区の溝からは、タタキ目がつけられた平底甕・壺・甑など70個体以上を含む大量の土師器（3世紀前半頃）が据え置かれた状態で出土しました。タタキ技法は畿内に顕著に認められる特徴であり、東海地方ではこれほど集中して出土した例はありません。畿内からの移住者、あるいは関係の強い人たちが伊保ムラにいたのでしょうか。



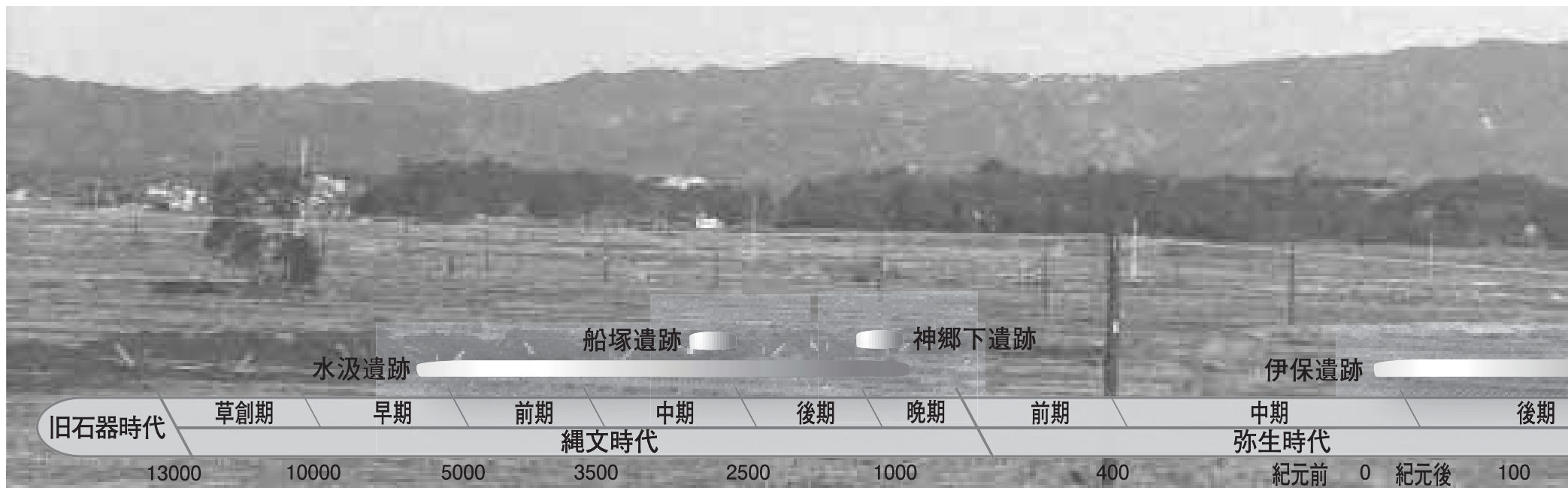
伊保遺跡のタタキ甕

■ 井上1号墳（井上町12丁目）

5世紀前半に築造された直径25mの円墳。2段築成で葺石、円筒埴輪を巡らせていました。木棺2基からは、武器（直刀・槍・鉾・鉄鏃など）が出土しました。槍の中には柄に組糸を巻き、漆で固めた資料もあります。当時の首長クラスの武装の様子をうかがうことができる貴重な資料です。

■ 上向イ田古窯跡群（亀首町上向イ田）

6～7世紀代の窯6基で構成されています。調査を行った3・4号窯は須恵器・形象埴輪・円筒埴輪を焼成しており、西三河では現状最古（6世紀中頃）に位置づけることができます。



■ 来姓古窯跡群（八草町八千草）

本窯は瀬戸市境の豊田市北西部に位置し、平安時代（10～11世紀）の灰釉陶器を焼成しています。また、1・2号窯は灰釉陶器のほか、素地を含む緑釉陶器を焼成しています。当時高級品であった緑釉陶器を生産した窯は、これまで猿投窯全体でも9基しか確認されておらず、非常に意義深い発見となります。

【猿投町誌編集委員会】

猿投町誌の編集は昭和39年9月から始まり、大橋勤氏を始めとする歴史部会は昭和42年までに数多くの遺跡の内容を明らかにしました。調査は土・日や夏休みなどを利用したもので、発掘調査費用も無いに等しく、地元や勤務先である猿投中学校・岩津高校・岡崎北高校の歴史クラブ生徒などを動員しての手弁当の調査でした。

【猿投遺跡調査会】

昭和42年に猿投町と合併した豊田市では、大型の開発が相次ぎ、昭和44年に姿を現した伊保遺跡については、残念ながら十分な対応策を打ち出すことができませんでした。



井上1号墳出土の鉄器

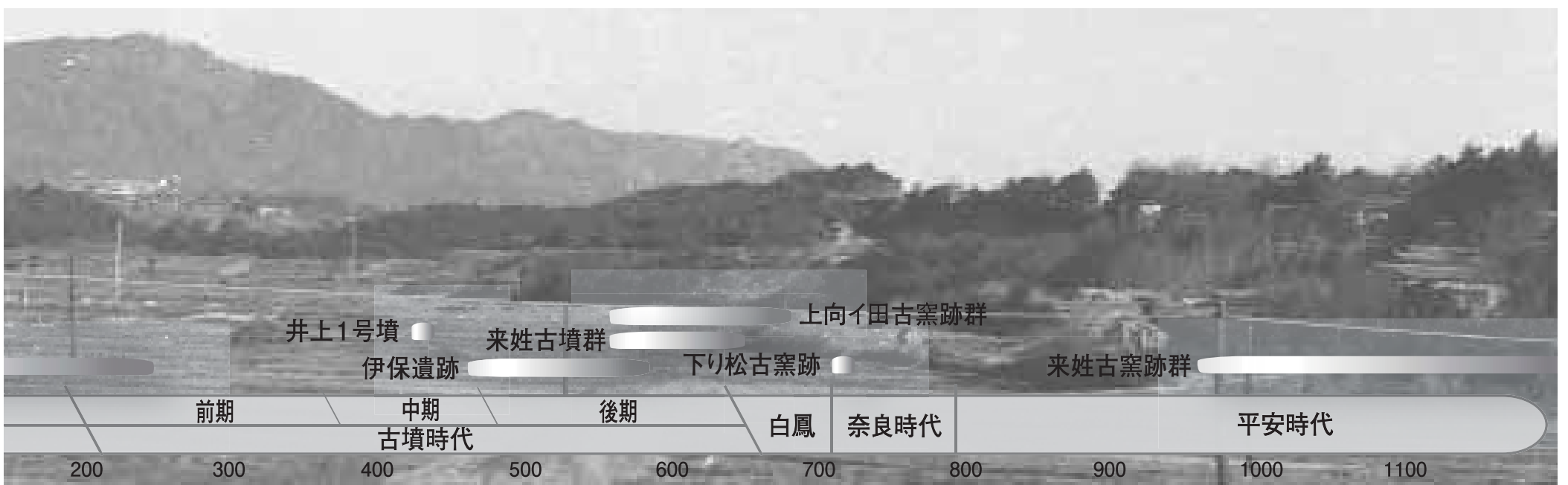


伊保遺跡の調査を行う大橋勤氏

調査の必要性を強く訴えていた地元の大橋勤氏は、伊保遺跡の記録を残すために猿投遺跡調査会を結成し、発掘調査に取りかかりました。12月25日から1月14日まで元旦を除く毎日、懸命の調査。その後、昭和45年7月に行った伊保遺跡柵口地区の調査では、古墳時代早期のタタキ甕や木製品などが多量に出土し、伊保遺跡の名を一躍全国に知らしめることになったのです。

豊田の歴史を豊かにしてくれる数々の出土品は、まさに会の活動の結晶であり、ふるさとの歴史を物語る真実の断片です。会の代表としてふるさとの遺跡を守り、記録を残すことに生涯を捧げた大橋勤氏は、残念ながらこの展覧会を見ることなく、平成18年7月に逝去されました。大橋氏と会の活動に改めて敬意を表するとともに、この展覧会が貴重な文化財を将来に伝えていくことの大切さを再認識できる場となれば幸いです。

（森 泰通）



地域資料館紹介

合併した6町村には、地域資料館以外にもいろいろな文化財施設などがあります。その中から、3施設を紹介します。

〔城跡公園足助城〕

足助町制100周年を記念して、平成5年に標高301mの真弓山に復元された山城です。発掘調査で検出された建物跡を基に、戦国時代の山城を復元したのは、全国でも初めての試みでした。本丸に高櫓と長屋、南の丸に厨(くりや)2棟、その他矢倉2棟、橋が復元されています。

足助城は、戦国時代に足助地方を領有した鈴木氏の城で、15世紀後半から16世紀末まで100年あまり存在しましたが、足助が交通の要地であったためか、松平、今川、武田と戦国諸雄の攻防の場となりました。

本丸からは足助の町並みを眼下に一望でき、また秋にはモミジで紅葉する飯盛山全山がながめられます。

○ 住 所 豊田市足助町須沢39-2
(さなげ足助バス「一の谷口」下車、徒歩40分)
TEL 0565-62-0770

○ 開館時間 午前9時～午後4時30分
○ 休 館 日 12月28日～1月4日
○ 入 場 料 大人300円、高校生100円



〔市場城址〕

標高380mの山頂にある戦国時代の山城です。

足助の鈴木氏から分かれた鈴木親信が文亀2年(1502)に築いたといわれ、文禄元年(1592)に4代重愛が退去するまで鈴木氏の居城でした。

主郭と南の郭には石垣が設けられ、また主郭の西北

下にある畝状空堀群は西三河の山間部では最も大規模なものです。

平成14年度に立ち木を抜き切りして眺望を良くし、駐車場・便所・東屋を建てました。あわせて四季桜を植え、20分～30分で一周できる遊歩道を整備しましたので、お気軽に散策してください。

○ 住 所 豊田市市場町城
(おばらバス「大草」下車、徒歩30分)



〔香恋の里〕

下山地域には地域資料館はありませんが、香恋の里の2階に縄文時代から鎌倉時代の土器、江戸時代の古文書、民具などが展示してあります。

○ 住 所 豊田市羽布町鬼ノ平5
TEL 0564-86-4121
○ 開館時間 午前10時～午後5時
○ 休 館 日 火曜日
○ 入 場 料 無料



(鈴木 昭彦)



埋蔵文化財調査速報



○^{どうがいと}堂外戸遺跡〔市木町堂外戸〕

今年度5,700m²の調査によって見つかった遺構は、古墳時代早期(3世紀前半)から奈良時代(8世紀後半)に及ぶ竪穴建物35棟、掘立柱建物27棟(総柱9・側柱18)、弥生時代中期(紀元前2世紀)の方形周溝墓4基となりました。また、第1次調査区を南北に縦断していた大溝の延長部分からは、古墳時代中期(4～5世紀)の土器のほか、前期にさかのぼる可能性を持つ土器も出土しています。調査区南側は遺構密度が高く、4世紀後半から7世紀にかけての大型(1辺7～8m)竪穴建物が4棟も建ち、南端には律令期の竪穴建物があります。遺跡は、南側の水田下にも確実に続いているようです。来年度は残る約2,900m²の調査を

行い、合計18,000m²に及ぶ発掘調査を完了させる予定です。(森 泰通)



1 辺7.7mの大型住居(4世紀後半)

○寺部区画整理事業に伴う試掘調査

〔千石町・上野町〕

千石町から上野町に及ぶ広い範囲において土地区画整理事業が施工される計画があり、これに先だって市教育委員会では試掘調査を3週間にわたって行いました。区画整理事業の予定地には周知の遺跡では千石遺跡(中世を中心とした集落跡)・不動堂館跡(中世の館跡)があり、また、寺部城関連遺跡(江戸時代の陣屋がおかれていた頃の武家屋敷や町屋)や高橋遺跡(弥生時代～平安時代の集落跡)などの遺跡が周囲には分布しています。そのため、周知の埋蔵文化財包蔵地(遺跡)ではない区域にもまだ知られていない遺跡が分布する可能性が十分に考えられ、区画整理事業の予定区域の南西部75,000m²と北東部41,000m²において9箇所の区画に20の試掘トレンチを設定して調査を行いました。

調査では幅0.8m×長さ5～25mの規模で深さ0.5～

1.5mまで小型の重機を用いて掘り下げて、細かなところを人が掘って土器や陶磁器が出土するかどうか、建物跡や溝などの遺構があるかどうかを確かめていきました。その結果、南西部の一部の区画ではすでに遺跡が失われてしまったところもありましたが、古瀬戸や山茶碗といった中世の陶磁器が多く出土し、溝の跡や生活の痕跡のある窪みなどが見つかりました。詳しくは本調査を行った上でないとわかりませんが、広い範囲に中世の遺跡が広がることがわかりました。また、千石遺跡に近い区画では弥生時代中期の壺型の土器が



出土しました。この土器はこれまで豊田市内ではあまり見つかったことがない時期の土器です。わずかな資料からですが、この区画に弥生時代中期の遺跡が埋もれていることが注目されます。今後の調査予定についてはまだ検討中で

すが、新たな遺跡が見つかり、調査が進んでこの地区の歴史に新しい発見があることでしょう。

(杉浦 裕幸)



文化財シリーズ



小原歌舞伎 市指定無形民俗文化財

歌舞伎は今から400年ほど前、京都で始まったと伝えられています。当時は正道を外れた格好や行いを傾き^{かぶ}といい、この振る舞いで流行歌に合わせて踊りを披露していました。その後、人形浄瑠璃の演目を取り入れたものが演じられ、現在私たちの知る形となって人気を博していきました。差金^{さしがね}や黒幕^{くろまく}、十八番^{おはこ}といった歌舞伎から生まれた言葉が今でも使われるように、この芝居が人々に如何に受け入れられたか、うかがい知ることができます。

江戸中期には全国にこの歌舞伎が広まり、素人が演じるようになります。小原歌舞伎もこのころから始まったものと考えられ、神社への奉納が目的でした。明治中期ごろからは芸達者な人々で組織した「万人講」が祭で興行契約を結んで演じるようになります。娯楽の乏しかった農村にはなくてはならないものと

なり、一年の疲れを癒す場ともなったのです。

こうした地芝居は昭和20年代まで盛んに行われてきましたが、農業中心の生活が工業へと移り変わる昭和40年代になると急速に衰え始めました。小原では伝統芸能である歌舞伎を何とかして後世に伝えたいと保存会が発足し、現在活動を続けています。振り付け、義太夫、三味線を自前で行うものは他に類がなく、小原独特の型が残っており、地区の文化祭では自治区でも歌舞伎が演じられています。



資料館NEWS

文化財防火デー

毎年1月26日は「文化財防火デー」です。これは昭和24年(1949)1月26日に奈良県法隆寺の金堂壁画を焼損したことから、文化財に対する防火意識の高揚を図ろうと昭和30年(1955)に設けられました。

豊田市では1月24日(水)足助八幡宮本殿、25日(木)六鹿邸、26日(金)市木辻堂、31日(水)妙昌寺で防火訓練を実施しました。



資料館のひなまつり

平成19年2月10日～3月11日

年に一度大切なひな人形を飾るひなまつりは、春の訪れを告げる桃の節句として今でも続けられる行事の一つです。資料館では土人形、御殿かざり、段かざり、内裏びなが飾られました。見学に訪れた人たちは、懐かしくも新鮮な気持ちで華やかな人形をみつめていました。

2月16日には大人向け、17日には親子向け「おこしもの」づくり講座、28日には中馬のおひなさんを訪ねる「おひなさまめぐりツアー」を開催しました。みなさんとても楽しんでいらっしかったです。

期間中は1,861名の来館者があり、大盛況に終わりました。



利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館) 年末年始

入場料 無料(特別展開催中は有料)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩15分

駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.59■

平成19年3月23日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095

E-mail: rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL: http://www.toyota-rekihaku.com

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。